

私のふるさと



山と川と坂の街

福田 美伸

9月1日からの3日間「八尾よいとおわらの本場 二百十日をオワラ出て踊る」おわら一色に。「越中八尾おわら風の盆」富山を代表する民謡です。人口2万人の街に、3日間で27万人以上の観光客が押しかけ、街では泊まることは、勿論、動くこともできなくなります。本部舞台がひけると、胡弓、三味線、太鼓、地方、踊り手が一団となり、坂の街を朝まで「町流し」が。「風の盆」が終わっても、1週間ほどは胡弓の残音が耳に、今でも身震いを感じます。また城ヶ山公園からは、立山連峰が一望できます。新雪の積った秋、日没5分前から日没1分後までの立山連峰は、黄金色から深紅へと変わる光景！あまりにも、美しくて…。富山出身者には、永遠に忘れることはできません。



上 夜明けの町流し、 下 秋の立山連峰

江戸時代より米、木材、和紙、養蚕業、売薬などで栄え、街道の拠点として育まれた美しい街並と文化が今も受け継がれ、八尾町は「美しい日本の歴史的風土100選」にも選ばれております。

八尾（やつお）とは八つの尾根があることから地名になりました。山と平野の境に発展した、坂の多い街です。神通川の支流である井田川が、街に沿って流れ、その支流が10河川以上もあります。流れは急ですが、ダムの水を放水して、カヌースラロームの国内競技大会が、実家から300mほどのところで毎年開催されています。

山は二百名山の「金剛堂山」。平安時代には、銅鉱石、鉄鉱石が発見されていたと古文書に。三百名山には「白木峰」。白木とは「ブナの森」を意味し、山頂付近は草原で、本当に素晴らしい山です。

江戸時代、越中と飛騨の境界線争いが、藩主を巻き込んだ大事件に！幕府の命令、1674年から国境は未確定のまま「棚上げ」に。1970年に林道ができ測量の結果、「小白木」の分岐稜線が、僅かに、高いことが判明。それから、さらに35年もかかって、富山県八尾町と岐阜県宮川村の間の、こじれにこじれた約4kmの境界線が、2007年に確定しました。実に330年。どうでもいい話ですが、富山県が広くなりました。「隣との境界線は一寸たりとも」。

川が多いから橋も多い。実家から外へ出ると、上と下の2kmほどの間に、長さ100m級の橋を11も見ることができます。芭蕉は奥の細道で「くろべ四十八が瀬とかや」のごとく、非常に河川の多いことに、驚きを表しております。富山藩は幕府からの命令で「河川堤防改修絶対」とされ、富山藩の石高は10万石。河川改修後、水田が一挙に増え、享保年間には14万石になったとも。私の知る限り、富山では、豪雨で水が堤防を1回越えただけで、決壊という言葉は存在しません。

山と川と坂の街。八尾は、素敵な街です。おわら踊りを見るなら、8月11日から下旬までの土、日、練習踊りを11の各町で見ることができます。また9月の末には「月見のおわら」。ぜひ一度、行って見てください。

注：富山へは冬に行くところではありません。寒くて、寒くて雪の魔女が住んでいます。でも、とても魚のおいしいところです！「さかなクン」も富山を絶賛しています！